文讀誦まし（面影を物語るかのやう。誠に宗祖上人は一代悲壮の厂史を収めて切なる波木井公の請を入れこの閑寂なる身延の山間に逃れて文餘の空中に孤ら子茅の吹巻にかめられたのてある秋は妻恋ふ鹿の聲を聞き、冬の朝に雪を眺められし草の庵消は実に此の庵てある又峰に登りては蕨を折りみ澤に下りては芹を摘み給ひしが住ひも亦この庵てある我は秋の千草の中を陰ろに遺蹟を履みながら萬感交し胸に迫つて去るにしのびずあいけにも尊き靈土よと瞑目合掌することやゝしばらくやかて我れは銀星まはらな胃腸を元来し方へと足を急いて暇途につつた。森の梢には鶯の聲が長しけに聞えてるた。

小春日和　　中一　辻能學子

小春日和の暖かさはつい誘はれてそゞろ歩きすれば何
時とはなく菊の香匂ひて山茶花の色も鮮かに見ゆ櫻の
花の狂ひ咲きせるも面白く老翁なぞの愛孫の手を曳引
きゝ、からその下に日影おいつゝ遊び居るも無邪氣にて
もし切髪姿した若後家のいたいけなる女の子の手を
引きて御寺参りするそゝ蝶なぞのまつはりつゝ戯びま
はるさまなんゞ貴に小春日和ゝを愛でらるつらきも溶き
消して人の心も軽かに見ゆ

散歩の一夕　中四　黒　敬　幽子勇

清き月光はそを吹く風の梢からもれて辺りの地上には
斑紋か浮動して居る叢にすだく虫の音も遥く秋をかゝ
つるの、如くもるのあはれである両谷御廟には誰かあげ
しやら細き燈明かかゝやいて居る傍の蔵形も稽戯きは